様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２１５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ２１２５５

研究課題名（和文）社会資源が限られた小規模町村に居住する精神障がいを持つ人々の「リカバリー」の構造

研究課題名（英文）The structure of "Recovery"of the Mentally Challenged in Small Towns with Limited Social Resources

研究代表者
今野　浩之（Konno, Hiroyuki）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・助教

研究者番号：６０５７３９０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、社会資源が限られた小規模町村で生活する精神障がいを持つ人々の「リカバリー」の構造を明らかにすることである。精神障がい者のRecoveryの概念分析では、個人レベル、コミュニティレベル、社会文化的レベルに分類された。リカバリーという意味が時代の中で変化し、個人だけにとどまらない多様性を含んだ概念であることが確認された。小規模町村で生活する精神障がい者のリカバリーは、個人の価値観、重要他者、地域性、コミュニティ活動への参加、日中の居場所、雇用の機会、家族や知人、保健福祉医療専門職の存在が重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
精神障がい者のRecoveryの概念分析では、個人レベル、コミュニティレベル、社会文化的レベルに分類され、リカバリーという意味が時代の中で変化し、個人だけにとどまらない多様性を含んだ概念であることが確認された。小規模町村で生活する精神障がい者のリカバリーは、個人の価値観、重要他者、地域性、コミュニティ活動への参加、日中の居場所、雇用の機会、家族や知人、保健福祉医療専門職の存在が重要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reveal the structure of “recovery” of the mentally challenged in small towns with limited social resources. The conceptual analysis of the recovery of mentally challenged can be classified as on their Individual level, community level, and Socio-cultural level. The concepts of “recovery” changes with time, and it is an integrated concept with diversity exceeding far the individual level. In the study, we witnessed that personal values, existence of important companions, the community, participation in community activities, living conditions, chances of employment, family and acquaintance, and existence of health and wealth fare professionals are vitally important.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：精神障がい者　リカバリー　地域

１．研究開始当初の背景

精神障がい者の Recovery（リカバリー）は、アメリカを中心とした諸外国で活発に議論が成され、先進諸国では政策においても重要な概念として用いられている。日本でも 2000 年以降、精神障がい者のリカバリーに関する考え方が広まり、従来から使われている「取り戻すこと、回復すること」という意味に限定しない「個人における回復のプロセス」を前提とした実践・研究報告は増加している。平成 26 年 4 月に精神保健及び精神障害者福祉に関する法律の一部が改正され、在院日数の短縮化、居宅における保健医療福祉サービスの充実が進められている。関連する社会支援プログラムとして、包括的地域生活支援プログラム（ACT）、元気回復行動プラン（WRAP）、個別就労支援プログラム（IPS）等、多様な取り組みが行われている。他方、欧米のリカバリーは脱施設化とノーマライゼーションを実現した後に出てきた考え方であり、日本の現状とは違いがあるといわれている（後藤,2010）。日本では歴史的背景から社会的入院患者が多く地域移行が進まない現状があり、さらに地域の精神保健サービスや国民に対する啓発活動はカナダやオーストラリアに比べると十分ではなく、精神障がい者への肯定的・許容的態度への障壁となっていると言われている。

日本でも精神障がい者の Recovery（リカバリー）の考え方は浸透しつつあるが、地方の小規模町村に着目すると、精神障がい者に対する社会資源そのものが十分とは言えない。小規模町村が点在する A 県内においても、拠点となる精神科病院は地方中心都市に限定的で、精神科や心療内科を標榜するクリニックの数自体が多くないという現状がある。

地方の小規模町村の特徴として、昔ながらの住民同士のコミュニティが形成され、互いの顔が見える関係であり、近隣同士の結束があるという強みがある。一方、結びつきが強いが故に、精神障がいに対する思い込みや偏見が根深く残っている面もあり、互いに敬遠しあう様子も垣間見られる。平成 25 年度障害者白書（内閣府）では 89.2%の人が障がい者に対し偏見や差別があると報告しているが、小規模町村においても、コミュニティの凝集性がさらに複雑な人間関係をもたらしていることが推測される。

研究者らが行った本研究に関連する先行調査では、精神障がいを有する困難事例に対応する町村保健師へインタビュー調査では「うまく繋がらないケースへの対応」「支援の着地点が定まらない」などが挙げられ、精神障がい者への支援に戸惑う内容もあった。フォーマルな社会資源が限定される小規模町村でインフォーマルな資源の活用を視野に入れ、小規模町村で活用可能な支援の方策を検討する基礎的資料を得ることが必要である。

２．研究の目的

本研究では、精神障がいを持つ人々の「Recovery」の概念分析を行い、今後の研究の主軸となる「Recovery」の概念について整理する。また、概念分析で導き出す「Recovery」の要素を端緒とし、小規模町村で活用可能な支援の方策を検討する基礎的資料を得るため、社会資源の限られた小規模町村で生活する精神障がいを持つ人々の「リカバリー」の構造を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は以下の 2 つの研究段階で実施した。

１）「Recovery」概念分析

概念の整理には、Rodgers が提唱する方法を用いた。Rodgers の手法は、概念を辞書の意味で捉えるのではなく、概念の社会文化的側面や学問間の比較、経時的変化を文脈を損なわない形で探究し、概念の理解を深め、看護学や看護実践への示唆を得ることを目的している方法である。

（１）データ収集方法

精神障がいがある者の回復（以下：回復）の概念がどのように使用されているかを明らかにするにあたり、看護学、医学、心理学や社会学に関する文献検討を行った。データベースは EBSCOhost を使用した。Recovery の歴史的背景を考慮し、検索期間を 2000 年から現在までとし、キーワードは「Recovery」「Mental disorders」「Mental illness」でタイトル検索を行った。検索された 151 件の英文献には、研究論文、雑誌記事、書籍のレビューが含まれていた。文献のタイトルや抄録を確認し、抽出した論文がタイトルのみで使用されている文献、または、本文内で記述がない文献は除外した。必要な全体論文数の約 20%にあたる 33 件を分析文献とした。加えて、2000 年以前の当事者による報告、抽出した文献中に引用文献として頻出している文献および図書を取り入れ、最終的に 50 件を分析対象とした。

（２）分析方法

Rodgers の手法では、学際的、社会文化的要素を考慮しながら①概念の特性や性質を示す「属性」、②概念が発生する前の「先行要件」および、③結果として起こる出来事を「帰結」として

示し、経時的変化を示した。

２）インタビュー調査
（１）インタビュー対象者
　本研究の対象者は地域活動支援センター、精神科デイケア、就労継続支援事業所利用者の計6名（男性3名、女性3名）であった。現時点で最後の入院経験から5年以上が経過し、服薬管理ができており、症状の安定している方を対象とした。対象者の選定にあたっては、施設のサービス管理者や精神保健福祉士に協力を依頼した。
（２）インタビュー内容
　質問内容は概念分析の項目を参考にした。現在の生活で感じていること、現在の生活に至るまでにあった出来事（印象に残っていることやその時の思い）、今後（将来）の生活について、ソーシャル・キャピタルに関連する項目（近所付き合い、親戚付き合い、友人との信頼度、社会参加状況）等について、面接時間は30～60分程度、半構成的面接調査を実施した。
（３）インタビューにあたっての配慮事項
　インタビュー対象の特性上、認知力や集中力、その日の体調等、心理的にも負担を考慮し、パートナーシップを築き上げられるようなCBPR（Community based participatory research）に基づいた対象者との関係づくり心がけ、何度も訪問を繰り返し、対象者との接点を継続しながら調査を行った。また、対象者の身近なサービス提供者や精神保健福祉士等にインタビュー前後の対象者の様子について協力を頂いた。研究者が籍を置く機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

以下、Recoveryの概念分析とインタビュー調査の結果について記述する。

１）「Recovery」概念分析
　概念は大別して、個人レベル、コミュニティレベル、社会文化的レベルに分類された。本分析におけるコミュニティレベルとは、ある一定の範囲の中に共通した社会的特徴をもって成立している生活共同体としての意味で示された。属性における個人レベルは「社会文化的背景を基盤とし、社会全体における循環的相互作用によって精神疾患に関する理解を促進しながら、地域社会、共同体、人とのつながりの中で、アイデンティティを再形成していく非直線的で多元的な個人の人生の行路」と定義された。先行要件、帰結のコミュニティレベルでは、身近な存在である家族や友人、主治医や保健福祉医療職との関係性等について記述された。また、社会的基盤や制度に関する項目は、社会文化的レベルに記述され、それぞれのレベルは互いに関連しあっていた。

２）インタビュー調査
　概念分析の結果をもとにインタビュー内容を整理した結果、小規模町村という社会文化的背景の中においても、精神障がい者のリカバリーは、個人の価値観や重要他者との関係性が大きく影響していることが明らかになった。また、精神障がいがある者の強みは精神障がい者本人の QOL の向上には必要不可欠であった。ここでいう“強み”とは、個人的な要素のみならず、コミュニティによる特色、地域性であり、コミュニティ活動への参加、日中の居場所、雇用の機会、家族や知人、保健福祉医療専門職の存在であることが明らかになった。

　精神障がい者のリカバリーという概念が､時代と共に変化し続け､個人だけにとどまらない、多様性をもった概念と変化していた。本研究によって、小規模町村における精神障がい者のリカバリーを支援の基礎的資料を見出すことができた。精神障がい者本人のみならず、重要他者である家族や知人、同じ境遇にある仲間や医師に直接かかわることもあるであろう。また、地域住民への直接的な働きかけや、ネットワークの形成に携わることもある。看護職としての関わりの幅も要求され、コミュニティの強み、個人の強みを捉えた看護実践が求められる。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計１件）

今野浩之，大森純子.「精神障がい者の Recovery」の概念分析．第6回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2018 Jan6-7; 大阪府　大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

６．研究組織
（１）研究代表者

今野浩之（KONNO, Hiroyuki）
山形県立保健医療大学・保健医療学部・助教
研究者番号：60573904

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。